

# メディア・リテラシーの測定に関する研究

後藤康志（新潟大学大学院現代社会文化研究科博士課程）

## はじめに

### メディア・リテラシーとは何か

最近、リテラシーの上に をつけた言葉が多く見受けられます。リテラシーには、「識字能力」と「高度で優雅な教養」という2側面があるといわれますが、多くの場合前者、つまり「読み書き能力」の意味で使われています。例えばコンピュータ・リテラシーといった場合、「コンピュータを上手に使う能力」「コンピュータの操作についての能力」という意味で使われる場合が多いようです。では、メディア・リテラシーとは何かですが、実は研究者の数だけ定義があるといつても良いくらい幅広い概念ですが、一応ここでは「主体的にメディアを活用して情報を獲得し、その内容を送り手・受け手の立場やメディアの特性をふまえて批判的に読み解くとともに、自らも情報を作り出してコミュニケーションする技能、知識、態度」である、としておきましょう。

### 情報活用能力とメディア・リテラシー

これと混同されやすい概念が、おそらく「情報活用能力」でしょう。「情報活用能力」はどちらかという、問題解決の道具として各種の情報メディアをいかに活用するか、という側面が強調されているように思います。問題解決は、問題の発見、仮説生成、データ収集と評価、得られた情報の再構成、そして公開といったプロセスをたどるでしょう。このときコンピュータや各種情報メディアを活用する能力が「情報活用能力」です。

この際、パソコンやインターネットといった電子メディア、本や新聞などの活字メディア、テレビや映画などの映像メディアが利用されることになります。このとき、メディアを道具としての利活用を強調するのが情報活用能力、メディアそのものを学習対象としてとらえる立場がメディア・リテラシーといつてもいいかもしれません。

### メディアは構成されている 批判的思考とメディア・リテラシー

当たり前のことですが、これらのメディアは「送り手」が生み出しているわけですから、無色透明・完全中立・公平無私・直球一本な情報とはいえません。例えば、テレビのドキュメンタリーは演出と「やらせ」のギリギリの線で作られていると自ら告白している制作者もいます。新聞の取材を受けた人なら、自分の発言のほんの一部、しかも場合によっては枝葉末節しか紙面に載らないこともご存じでしょう。メディアは価値観やイデオロギーを伝え、その背景には社会的、政治的なものがあるのです。

さらに深刻なのは、このようなメディアからの情報が、人々の考えに影響を及ぼすことでしょう。政治的に微妙な関係にある国では、日本人が「よいこと」をしても新聞には載らず、「悪いこと」をすると「それみたことか」とばかり大きく報道されるといいます。結果として、「やはり日本人というのは だ」というイメージが増幅され、報道側もそのイメージに答えるようなニュースを選びがちになります。そのような目で見ると、我が国の報道もそのような面があるのに気づきます。良識のある一部の両国の人たちは、このようなメディアの報道に憂えているわけです。このように、受け手と送り手を踏まえてメディアからの情報を鵜呑みにしないことが大切で、これを「批判的思考」と呼んでいます。

## メディア・リテラシー測定の必要性

「このような能力が必要だ」という議論はかなり以前からありました。しかし、「ウチの子供たちはこのような能力がこの状態だから、学年末までに8割はここまでは上げよう」という具体的な話にはなってきませんでした。例えば算数なら九九ができなければ割り算はできないというように、Aという能力とBという能力の関係は見えやすいといえます。能力の測定は、その内容に即したテストによってなされます。メディア・リテラシーについては、いかなる能力が下位の能力なのか、下位となる能力間の関係はどうなっているのか（例えばコンピュータ利用能力が高い人は、批判的思考力も高いのか等）よく分かっていないのです。メディア・リテラシーを測定する物差しができれば、学年発達の特徴にあわせたカリキュラム作りや、評価の手助けになるでしょう。この研究では、そのような測定のための物差し作りについて提案しています。

なお、本稿は2004年10月17日に関西大学で開催された日本教育メディア学会課題研究「メディアリテラシーの理論と実践の批判的検討」における筆者の発表「デジタル時代のメディア・リテラシーをいかに測定するか」の当日配付資料です。

## 1. 背景と目的

メディア・リテラシーは情報の受信と発信に関わる複合的な能力であり、その定義は様々である。水越・中橋(2002)はメディア・リテラシーの構成要素をメディアの操作、理解、読解・解釈・鑑賞、批判的理解、表現、コミュニケーションとして整理している。Christ(1997)はメディア教育プログラムの評価の観点として「技能」、「知識」、「態度・情緒・価値」の3つを挙げ、映像リテラシーやコンピュータ・リテラシー、批判的思考、継続的に学び続ける意欲や態度等を挙げている。以上に共通するのはメディアの操作に関わる「メディア操作スキル」、「批判的思考」、「メディアに対する主体的態度」であるといえる。

### 1.1 「批判的な受け手」としての流れ

Masterman が指摘するように「メディアは構成されたもの」である。メディア・リテラシーの定義の中でまず強調されるのが、「メディアからの情報を主体的かつ批判的に読み解く能力」である。ここで強調されるのは「批判的思考」といえる。

### 1.2 「メディアをコミュニケーションで活用できる送り手」としての流れ

ビデオやコンピュータなどのメディアが

普及すると、学習者自身が作り手となることでより深くメディアが理解できることがいわれるようになる。我が国においてはグリュンバルト宣言以降、メディアから情報を得るだけでなく、メディアを表現やコミュニケーションの道具として位置づけ、その利活用能力を目指した実践が行われてきた。ここでは「メディア操作スキル」と「主体的態度」が重視されてきた。

### 1.3 「デジタルメディアの賢い使い手」としての流れ

そして現在、デジタルメディアの賢い使い手としてのリテラシーが重視される時代に突入している。インターネットやコンピュータ、携帯電話などの情報機器はますます多機能化・高度化している。「メディア操作スキル」を駆使し「メディアに対する主体的態度」を発揮して情報を収集・整理・発信する時代といえる。

デジタル時代の情報発信の特徴は、誰もが送り手になることができ、それらがパソコンや携帯電話のディスプレイという同列の場面で、あたかも同じ価値を持つかのように提供される点である。そこには今まで以上に「批判的思考」が求められると思われる。

## 1.4 目的

デジタル時代のメディア・リテラシーをいかに把握し、デジタル時代のメディア・リテラシーの発達の特徴を明らかにするのか。この問題意識から、筆者らはメディア・リテラシー尺度の作成に取り組んできた(Gotoh&Ikuta2004)。

この中で、特にメディアに対する批判的思考尺度の信頼性・妥当性の問題、小学生から大学生、成人を対象とした調査における映像活用の可能性、メディアから情報を分析し真偽の程度を捉える分析の力量を測定し得る尺度の必要性が指摘された。前者は、以上を踏まえ、本研究は次の2点を目的とする。

技能・態度・批判的思考を下位尺度とするメディア・リテラシー尺度を作成し、その妥当性を検討する。

ウェブ情報を分析する尺度を作成し、信頼性及び妥当性を検討する。

## 2. スキル,態度,批判的思考の尺度

### 2.1 項目の作成

本研究ではメディア・リテラシーを図1のように捉える。

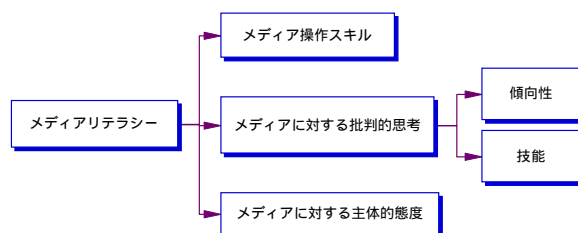


図1 メディア・リテラシー

すなわち、メディア・リテラシーを「メディア・操作スキル」、「メディアに対する批判的思考(傾向性・技能)」、「メディアに対する主体的な態度」の3つの下位尺度に分けて測定する。

尺度の作成にあたっては、鈴木ら(1992)、電通総研(1999,2000,2001,2002)、NHK放送文化研究所、宮田(2001)、小池(2004)、鈴木ら(1992)、高比良ら(2001)などの項目を参考に作成した。

### 2.2 批判的思考の構成要素

メディアにおける批判的思考を考える前

に、一般的な批判的思考の研究成果をレビューする。Ennis(1987)は批判的思考の構成要素を態度や情意的な傾向性(disposition)と、認知的側面である能力(ability)とに分けて整理している。「信頼性のある情報源を使おうとする態度」と「情報源の信頼性を検討するための視点を持ち、使う能力」を区別される。批判的思考能力の測定も、この2つに分けて行われている。

### 2.3 批判的思考の測定

批判的思考の能力を測定する尺度の代表は Watson-Graser のテストで、推論課題、演繹的推論課題、議論評価課題などにより構成されており、多くの先行研究で利用されている。我が国にも久原ら(1993)によって紹介されている。態度の代表的な尺度としてはカリフォルニア批判的思考態度尺度(Facione&Facione,1992)があり、知的好奇心、開かれた心、分析的、真実の追究など7因子から構成されている。この他に自由記述式の尺度もあるが、処理の煩瑣さや一律の基準で評価しにくいという問題から多肢選択法が大半である。平山(2004)によれば、これらの研究の結果、能力について言語能力と非言語能力を対象としてそれらを測定する知能検査と課題成績が関係することが明らかになっている。

### 2.4 メディアに対する批判的思考

これに対してメディアからの情報をいかに批判的に読み解くかという批判的思考能力の測定に関する研究はほとんど扱われていない。

批判的思考に関わる調査として NHK 放送文化研究所調査があり「専門的なテレビの見方」として「同じ問題でもキャスターや番組によって伝え方が違うと思う」などの項目を調査している。また小池(2004)はメディア・リテラシー講座の前後にオンタリオ州の定義に基づいて質問項目を作成し、講座の事前・事後に調査を行い、事後に批判的思考が高まったと報告している。

### 2.5 メディア・リテラシー尺度の必要性

これまで見てきたように、メディア・リテラシー測定における「批判的思考」の測定は、その重要性のわりには進んでいない

といえる。批判的思考能力テストにおいては、態度と能力を区別し、それぞれに尺度を開発し研究を蓄積してきた経緯がある。メディア・リテラシーにおいても、この知見を生かし、尺度を開発する必要がある。

## 2.6 対象

新潟市内の高校生 401 名を対象とした。調査時期は 2004 年 6 月である。

## 2.7 方法

### 2.7.1 メディア操作スキルに関わる項目

「自分の好きなホームページをお気に入りに入れる」、「写真やビデオをコンピュータに取りこみ、文書にはりつける」といった項目について「できるし、よくする」「できる」「できない」「何のことが分からない」の 4 つから 1 つだけ当てはまるものを選択してもらった。これを「できるし、よくする」を 4 点、「できる」3 点、「できない」2 点、「何のことが分からない」1 点というように得点化した。

### 2.7.2 批判的思考・傾向性の項目

批判的思考の研究では批判的思考の構成要素を態度や情意的な傾向性(disposition)と、認知的側面である能力(ability)とに分けて考えている(Ennis1987)。ここでいう批判的思考は傾向性に関わるもので、メディアに対する情報を「構成されたもの」であるとしてみているかどうかを自己評価してもらう。「新聞記者はたくさんの情報を集めるけれども、新聞記事になるのはその一部の情報である。」「知りたいと思う情報を得るにはテレビで十分だ\*」といった項目について、「そう思う」「ややそう思う」「どちらでもない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の 5 つのうち一つだけを選択してもらった。「そう思う」が 4 点、「ややそう思う」3 点、「あまりそう思わない」2 点、「そう思わない」1 点として得点化した逆転項目(\*)については「そう思わない」が 4 点になるように得点化した。

### 2.7.3 主体的な態度に関わる項目

デジタル時代のメディア・リテラシーは、メディアからの情報を漫然と受容するだけでなく、自ら進んで情報を求めたり、疑問点があったら複数のメディアにあたって情報を収集したりする主体性が必要である。

主体的な態度として「知りたいと思ったことは人に聞くより本やインターネットでさがす方だ」といった項目について批判的思考と同様に得点化した。

### 2.7.4 メディアに対する知覚

妥当性を検討するために、メディアに対する知覚を測定した。これは、「インターネット」、「本」、「新聞」、「テレビ」の 4 つについて「情報が新しいと思う順番」、「情報が正しいと思う順番」、「好きな順番」、「簡単に情報が得られると思う順番」の順位をつけてもらうものである。これを 1 位 4 点以下 4 位 1 点になるように得点化した。

### 2.7.5 信頼性の検討

作成された尺度の信頼性を検討するために尺度と各項目間の相関係数の I T 相関分析、G P 分析を行った。

### 2.7.6 妥当性の検討

「技能」、「態度」、「批判的思考・傾向性」の妥当性を検討するために、それぞれの上位・下位群ごとのメディアに対する知覚の違いを検討する。

## 2.8 結果と考察

### 2.8.1 項目の検討

作成した 42 項目について確認的な因子分析を行い、スキル、態度、批判的思考という構造が得られるか、批判的思考の項目間の関係はどうなっているかを確認した(SPSS11.5J を使用)。結果としていかに説明する 7 因子を抽出した。

第一因子は「自分の好きなホームページをお気に入りに入れる」、「写真やビデオをコンピュータに取りこみ、文書にはりつける」、「インターネットや CD の百科事典を使って調べる」などメディア操作に関わる項目が多いので、「メディア操作スキル因子」と命名した。

第二因子は「新聞記者が集めた情報は、全てが記事になる」、「同じ番組は、だれが見ても同じように理解される」、「テレビの同じ場面で、音楽(BGM)が変わっても受ける感じはそれほど変わらない」などで「メディアの構成に関する因子」と命名した。

第三因子は「知りたいと思う情報を得るにはテレビで十分だ\*」、「新しい知識を得るのにテレビだけでなく新聞や本も役立ててい

る、「テレビではニュースや報道番組も見る」といった項目が多く、「マスメディアに対する主体的受信態度」と命名した。

第四因子は「コマーシャルでは、よく売れるように商品のイメージを強調している」、「テレビで放送されたことが、新しい流行になることがある」、「テレビや新聞がどう情報を伝えるかによって、人々のものの考え方は大きく変わる」といった項目が多く、「メディアの社会への影響因子」と命名した。

第五因子は「写真やビデオをコンピュータに取りこみ、文書にはりつける」、「ホームページを作る」、「前にパソコンに保存した文書をよびだして直す」、「ワープロ・ソフトで文書を作る」といった項目であり、「発信メディアの利用スキル因子」と命名した。

第六因子は「テレビや新聞をみていて伝え方が公平ではないと思うことがある」、「テレビをみていて、大げさな表現をしていると感じるときがある」などであり、「メディアの誇大表現への防御因子」と命名した。

第七因子は「自分の好きなホームページをお気に入りに入れる」、「知りたいと思う情報を得るにはテレビで十分だ\*」、「知りたいと思ったことは人に聞くより本やインターネットでさがす方だ」などであり、「複数メディアによる主体的受信因子」と命名した。この因子は、スキルの項目と主体的態度の項目が共に含まれているところが特徴である。

主体的な態度については、「マスメディアに対する主体的受信態度」と「複数メディアによる主体的受信因子」があり、いずれもメディアからの情報を主体的に受信しようとする態度に関わる因子である。

批判的な思考については、メディアは構成されたものであり、制作者によって作られたものであるという「メディアの構成に関する因子」、メディアが社会に影響を与えているという「メディアの社会への影響因子」、マスコミからの情報はイメージを強めるために作られているという「メディアの誇大表現への防御因子」に関わるものである。

以上から、作成した尺度から抽出した因子をまとめると、「メディア操作スキル因子」と「発信メディアの利用スキル因子」は、ま

とめてメディア操作スキルに関わる因子と見ることができる。作成した尺度は想定した因子の構造を持っていることが分かった。

項目の分布について見たところ「批判的思考・傾向性」については天井効果が現れている項目があったものの、一応残すことにした。従って、「批判的思考・傾向性」は暫定的な尺度である。技能 10 項目、態度 8 項目、批判的思考・傾向性 10 項目を採用し分析対象とした。

## 2.8.2 信頼性の検討

尺度と各項目間の相関係数は「メディア操作スキル」では 9 項目で .5 から .7、「批判的思考・傾向性」では 9 項目で .4 から .5、「主体的態度」では 7 項目で .4 から .6 であり、高い相関を示している。

表 1 IT 相関分析 (スキル)

	メディア操作
メディア操作スキル総和	1
ワープロ・ソフトで文書を作る	.508(**)
パソコンや携帯でメールをやりとりする	.315(**)
ヤフー(yahoo)やグー(goo)などで必要な情報を見つける	.645(**)
自分の好きなホームページをお気に入りに入れる	.705(**)
写真やビデオをコンピュータに取りこみ、文書にはりつける	.724(**)
インターネットやCDの百科事典を使って調べる	.684(**)
電子メールにファイルを添付して(つけ	.600(**)
前にパソコンに保存した文書をよびだして直す	.605(**)
ホームページを作る	.605(**)
携帯電話でニュースを読んだり、時刻表を調べたりする	.511(**)

表 2 IT 相関分析 (主体的態度)

	主体的態度
主体的態度総和	1
知りたいと思ったことは人に聞くより本やインターネットでさがす方だ	.508(**)
テレビではニュースや報道番組も見ると、調べものをするとき、本や新聞、インターネットのどれで調べたらいいかまず	.459(**)
知りたいと思う情報を得るにはテレビで十分だ	.478(**)
新しい知識を得るのにテレビだけでなく新聞や本も役立っている	.610(**)
必要な情報を得るためなら、多少のお金がかかってもかまわない	.578(**)
自分の好きなことや興味のあることで知らないことがあると気になる	.489(**)
テレビの情報でもそのまま信じるよりも他のテレビ局の番組や新聞、インターネットで確かめた方がよい	.412(**)
	.324(**)

表 3 IT 相関分析 (批判的思考)

	批判的思考総和
批判的思考総和	1
新聞記者が集めた情報は、全てが記事になる	.574(**)
テレビの同じ場で、音楽 (BGM) が変わっても受ける感じはそれほど変わらない	.512(**)
ニュースを作る人は、見る人を楽しませることは考えていない	.416(**)
同じ番組は、だれが見ても同じように理解される。	.540(**)
コマーシャルでは、よく売れるように商品のイメージを強調している	.469(**)
テレビで放送されたことが、新しい流行になることがある	.374(**)
テレビや新聞がどう情報を伝えるかによって、人々のものの考え方は大きく変わる	.445(**)
テレビをみていて、大げさな表現をしていると感じるときがある	.418(**)
テレビや新聞をみていて伝え方が公平ではないと思うことがある	.468(**)
本に書いてあったこととおおげさだと思ったことがある	.413(**)

また GP 分析の結果、全ての項目で上位群と下位群の平均値差に 1%水準の有意差が見られた。以上から、尺度の信頼性は高いと思われる。

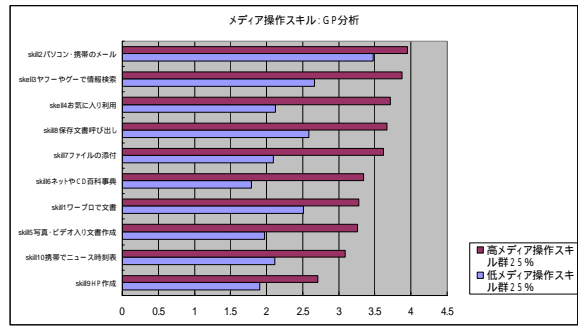


図 2 GP 分析 (スキル)

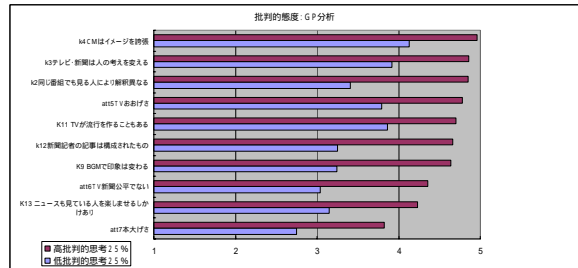


図 3 GP 分析 (批判的思考)

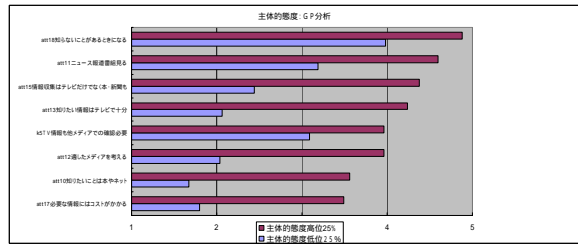


図 4 GP 分析 (主体的態度)

2.8.3 妥当性の検討

メディア操作スキルでみると「スキルが高いほどインターネットの情報が新しく、簡単に使え、好んで」いる。その一方でインターネットの情報はマスメディアに比べると「信頼性は低い」と気づいてもいる。これに対して、スキルが低いほど「テレビを好み、正確で、好んで」いる (図 5)。

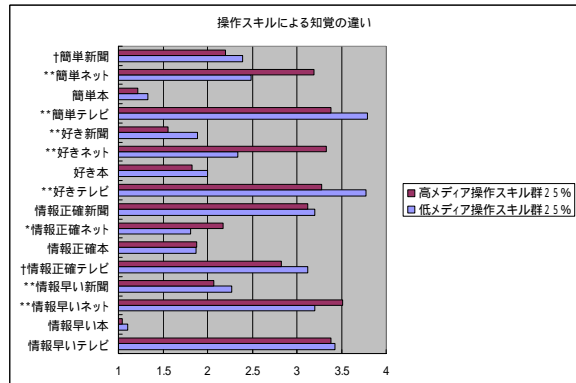


図 5 メディア操作スキルによる知覚の差

スキル、批判的思考、主体的態度の高低による知覚の差異を検討するために、平均値の差の検定を行い、有意差のある項目を書き出したのが表 4,5,6 である。主体的な態度でも同様に、「高主体性群はインターネット、低主体性群はテレビ」という図式である。

表 4 知覚とスキル

	速報性	正確性	好み	簡便性
高スキル群	インターネット	インターネット	インターネット	インターネット
低スキル群	新聞	テレビ	テレビ・新聞	テレビ

表 5 知覚と主体的態度

	速報性	正確性	好み	簡便性
高主体的態度群	インターネット	インターネット	インターネット	インターネット
低主体的態度群	新聞	テレビ	テレビ	テレビ

表 6 知覚と批判的思考

	速報性	正確性	好み	簡便性
高批判的思考群				
低批判的思考群		テレビ	テレビ	

尺度間の相関を見ると有意な相関があることから(表 7) メディア・リテラシーが高いほど複数メディアを利活用し、スキルも高いのに対し、低いほどテレビに依存する傾向が顕著である、といえる。これは経験的な知識とも合致するもので、作成した尺度の妥当性が示唆されたといえる。

表 7 尺度間の相関係数

	批判的思考	メディア操作スキル	主体的態度
批判的思考		.153(**)	.374(**)
メディア操作スキル			.316(**)
主体的態度			

### 3. ウェブ情報の読みとり(批判的思考・技能)の尺度

#### 3.1 項目の作成

次に、デジタル時代のメディアの主要なテキストであるインターネットの情報についての読みとり(批判的思考・技能)の能力を測定する尺度について述べる。ウェブの情報を分析する視点をどの程度有しているかを測定する尺度を Harris(1997)のインターネット上の情報源の評価観点を参考に項目を作成した。具体的には

- 「ホームページを作った人は誰か(作成主体)」
- 「いつ頃作られたホームページか(作成時期)」
- 「ホームページのドメイン(co,ac,go など)はどこか(ドメイン)」

- 「ホームページに作った人の住所や連絡先が書いてあるか(連絡先の明記)」
- 「何のために作られたホームページなのか(作成目的)」
- 「企業や官庁など団体が作ったものか、個人が作ったものか(作成主体の属性)」

について、「とても気になる」、「少し気になる」、「あまり気にならない」、「全く気にならない」の4件法で選択してもらい、「とても気になる」が4点、「全く気にならない」が1点になるように得点化し、6項目の合計点を尺度値とした。

#### 3.2 対象

現職教員 38 名を対象とした。調査時期は 2004 年 6 月である。

#### 3.3 方法

##### 3.3.1 信頼性の検討

作成された尺度の信頼性を検討するために尺度と各項目間の相関係数の分析、G P 分析、分布の確認、信頼性係数の算出を行った。

##### 3.3.2 妥当性の検討

ウェブからの情報(表 8)を確認するために必要な情報とその情報源は何かについて自由記述式で回答してもらい、得点上位群と得点下位群の記述内容を比較・検討した。時間は 20 分程度で、書けなくなった時点で終了してもらった。

表 8 自由記述問題の状況設定

あるホームページでダイエット食品が紹介されていた。ホームページでは、ある医学者の紹介文として「この食品は非常に手の込んだ方法で作られているため高価だが、効果もある」と書いてあった。さらに実際にこの食品でダイエットに成功した3人の体験談ものせられていた

#### 3.4 結果と考察

##### 3.4.1 信頼性の検討

相関分析について、尺度と各項目間の相関係数は.511から.718と高い相関を示していた。G P 分析においては得点分布から得点上位 25% (8 名)と得点下位 25%(7 名)を抽出し、得点上位群と得点下位群の平均値差を比較した(図 3)。結果として全ての項目において 1%水準で有意であった。



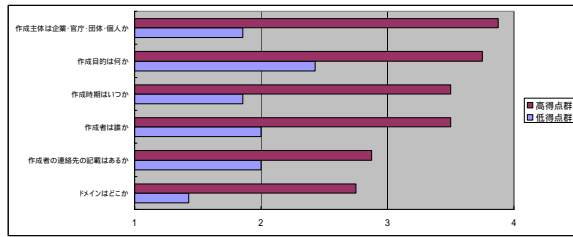


図 6 GP分析

これを見ると、上位群と下位群の差が際だっているのが作成主体であり、下位群ではインターネットの情報の作成主体が企業・官庁・団体・個人のどれであるかを殆ど気にせず利用していることが伺える。また、作成者は誰か、作成時期はいつかといったことについてもそれほど関心を払っていない。これらはマスコミ情報であれば一目瞭然で分かる内容であろう。誰もが自由に情報を提供でき、だからこそより批判的な見方が必要なインターネットといえるが、下位群にあってはそういったことが意識化されず、インターネットに接しているともいえるだろう。

次に分布について、表9は「ホームページを作った人は誰か」についての反応をまとめたものである。全体としては「あまり気にならない」「少し気になる」を中心に分布しているものの、下位群においては「あまり気にならない」を中心に分布し、上位群では「少し気になる」「とても気になる」を中心に分布している。6つの項目全てにおいて表2のような分布が得られており、カイ自乗検定も有意かつ有意傾向であった。

表9 群毎の反応の比較(単位・人)

作成者は誰か	下位 25%群	25~ 50%群	50~ 75%群	上位 25%群	合計
全く気にならない	1	0	0	0	1
あまり気にならない	5	4	0	0	9
少し気になる	1	6	10	4	21
とても気になる	0	0	2	4	6
合計	7	10	12	8	37

信頼性係数を算出したところ.766であった。以上から、作成した尺度の信頼性は高いことが示唆された。

### 3.5 妥当性の検討

自由記述作文の記述内容を Harris(1997)のカテゴリー(情報源の確実性、情報の正確さ、情報の理性度、サポートす

る情報の有無)に従って分類した。得点上位群と得点下位群の記述内容を比較したところ、次のような特徴が認められた。

まず記述量であるが、得点上位群の自由記述は量が多く、4つのカテゴリーを網羅する形で記述されていた。

次に、記述内容であるが、下位群の記述内容が項目のみを示すものが多いのに対して、上位群の記述は「判断を下すためにどんな情報が欠けているか」、「代わりにいかなる情報が必要で、どう収集したらよいか」まで言及している点が特徴である。

例えば 情報源の確実性のカテゴリーにおいて、下位群では記述そのものがない、あっても単に項目のみのレベルに留まるものが多いのに対し、上位群はというレベルまで踏み込んだ記述が多く見られた(表10)。

表10 自由記述の例

下位群	医学者についての情報
上位群	確認事項 - ある医学者。 確認内容 - 栄養(に関する・筆者加筆)学会での信頼と実績はあるか。 手段 - 学会機関誌・業界の人。

単に医学者についての情報が得られたとしても、それは情報源の確実性を保証することにはならない。言及している内容がその人の専攻分野やその領域における周囲の評価と整合していなければ、いかに著名な人間の発言でも情報源の確実性を保証したことにならないからである。限られたサンプルからの知見でしかないが、尺度の妥当性は高いことが示唆されたといえる。

## 4. まとめと今後の課題

### 4.1 まとめ

作成した「スキル」「態度」「批判的思考・傾向性」に関する尺度は高い内の一貫性が認められた。また、尺度とメディアに対する知覚を検討したところ主体的態度や技能が高い群ほどインターネットを好み、有用であると知覚しているのに対して、そうでない群ほどテレビに依存しているといったように経験的な知識と合致する結果が得られた。以上から、作成した尺度は一定の信頼性・妥当性が確保



されたものと考えられる。

また、ウェブ情報の読みとりに関する尺度は「批判的思考・技能」の一側面を簡便に測定できることが示唆された。自由記述は時間もかかり処理も煩瑣であるため、簡便な尺度は実用上も有用であると思われる。

#### 4.2 今後の課題

メディア・リテラシーの評価においては標準化されたテストだけでなく、観察等のあらゆる情報を収集して行われることが推奨されている(Christ1997)。質問紙調査はその一側面を切り取ることしかできないのであり、量的アプローチと質的アプローチとの併用が必要である。

またデジタル時代の主たるテキストである映像について、その真偽や情報や構成された背景をについて、例えば短いビデオクリップによる映像視聴を行い、その分析と解釈を求めるタイプの尺度を開発する必要がある。

(付記：本発表の2の一部は Gotoh & Ikuta(2004) A Study of Children's Media Literacy in Japan, Paper presented at British Educational Research Association2004, University of Manchester Institute of Science & Technology, UK.に加筆・修正を加えたものである。)

#### 5. 引用参考文献

- Christ, W. G. (1997) Media Education Assessment Handbook. Lawrence Erlbaum Associates, New Jersey
- Ennis, R(1987) A Taxonomy of Critical Thinking Dispositions and Abilities .Teaching thinking skills: theory and practice. Edited by Joan Boykoff Baron, Robert J. Sternberg. Freeman.

第 11 回日本教育メディア学会

発表資料

於:関西大学

課題研究 「メディアリテラシーの理論と実践の批判的検討」

# デジタル時代のメディア・リテラシーを いかに測定するか

2004 年 10 月 17 日

後藤 康志(新潟大学大学院現代社会文化研究科)

生田 孝至(新潟大学)